女子大学生と女子高校生の日常生活における 不潔に対する反応と食行動

渡辺雄二*・隅田衣江*・太田 徹**

(*大妻女子大学, **盛岡大学)

(平成25年11月13日受付, 平成26年3月4日受理)

A study of attitude to uncleanness on daily life and eating behavior in female college students and female high school students

Yuji Watanabe*, Kinue Sumita*, Toru Ota**

* *Otsuna Women's University*, 12, Sanban-cho Chiyoda-ku, Tokyo, 102-8357

** *Morioka University*, 808, Sunagome, Takizawa-shi, Iwate, 020-0694

*〒102-8357 東京都千代田区三番町12

**〒020-0694 岩手県滝沢市砂込808

A relationship between eating behavior and attitude to uncleanness of daily life in female college students and female high school students was statistically studied by method of questionnaire. Following results were obtained;

- 1) The fundamental factor of attitude to uncleanness on daily life was "hating to make use of goods placed public utility".
- 2) 274 subjects were classified into three groups by using their principal component scores.
- 3) In attitude to uncleanness, 44 subjects who showed over minus 0.9 score were liable to hate hanging on to straps of trains and buses, touching door knobs and keyboards of personal computers, using toilet seats, sofas and mules in public utility. On the other hand, 41 subjects who showed over plus 0.9 score were not.
- 4) In eating behavior, they who showed over minus 0.9 score were liable to pay attention to the dirt of tablewares and tables at the time of eating out. But they who showed over plus 0.9 score were not.

From above results, it was speculated their attitude to uncleanness on daily life closely related eating behavior of female college students and female high school students.

1. 緒 言

“清潔”は、生理的欲求であるとともに社会文化的要求に基づくもので、清潔志向の高まりは、近年の社会的現象の一つである¹⁾。その志向の高まりの背景として、「抗菌」、「除菌」および「殺菌」を勧めるテレビコマーシャルなどのメディアの影響²⁾により日常生活における清潔行動が高まり、「抗菌」、「除菌」、「殺菌」などを謳った日用品が多種類市販されている^{3, 4)}。しかし、藤田^{5, 6)}は、

過度の清潔行動は健康を害すると指摘している。一方、電車内の床やコンビニエンスストアの駐車場などに直接座る若年者の行動をよく見かけるようになり、若年者の清潔・不潔に対する考え方は、近年多様化していると思われる。清潔行動の多様化には、清潔に対する意識の多様化が起因していると考えられた。そのような背景から、大学生、高校生または専門学校生の清潔行動を、服部ら¹⁾、葉山ら²⁾、高田ら⁷⁾、渡辺ら⁸⁾および田中ら⁹⁾が報告している。しかし、それらの報告では、清潔行動と食行動

との関連性についての検討が行われていない。

2010年に秋田県が実施した「食品の安全・安心に関するアンケート調査」の結果¹⁰⁾では、食品販売店を利用する場合、気になることは「品質」の次に「衛生管理」の回答が多く、2009年に農林水産省が実施した「漁港の衛生管理に関するアンケート」の結果¹¹⁾では、水産物の品質を保つために強化してほしい対策として、「水産物の温度管理の徹底」の次に、「殺菌処理した水や氷の使用」の回答が多かった。さらに、2005年に独立行政法人国民生活センターが実施した「食品関連事業者の消費者対応に関する調査」の結果¹²⁾では、国民生活センターへの食品に関する相談内容で最も多かったのが「品質面」で、次いで「安全・衛生面」であった。これらのアンケート調査結果から、食品に関する衛生面、すなわち清潔さが人の食意識や食行動に大きく寄与していると示唆された。著者らは、女性の食行動に関する研究の一環として女子大学生の食行動と食意識との関連を報告した¹³⁾。

本研究では、女性の食行動に関する研究の一環として、女子大学生および女子高校生の日常生活における清潔に対する反応と食行動との関連性について調べ、興味ある知見が得られたので、以下報告する。

2. 方 法

(1) 調査対象者

調査対象者は、管理栄養士または栄養士を専攻とする女子大学生133人と、オープンキャンパスでの体験授業を受講した女子高校生141人の計274人である。なお、調査協力は「個人の自由である」旨を口頭で伝え、調査協力の同意を得た後に調査を行った。

(2) 調査方法

調査は、クラス単位による集合調査法¹⁴⁾で、質問紙票を用いて無記名自己記入法にて、2012年7月に実施した。

(3) 調査内容

主な調査内容は、①日常生活における潔癖行動、②食品を購入する行動、③外食行動、④不安を感じる食品の安全性などに大別される。①日常生活における潔癖行動に関する設問は、服部ら¹⁾、葉山ら²⁾、高田ら⁷⁾、渡辺ら⁸⁾の文献を、②食品を購入する行動、③外食行動に関する設問は、著者ら^{13,15)}の文献と食生活データに関する文献¹⁶⁾を、④不安を感じる食品の安全性に関する設問は、食の安全と健康意識に関する文献¹⁷⁾を、それぞれ参考にして作成した。

(4) 集計および解析方法

調査対象者の日常生活における潔癖行動に対する基本因子を探索するために、主成分分析法を用いた。主成分分析法で抽出された第1主成分に対する調査対象者の主成分得点を算出し、主成分得点の高低別に調査対象者を

分類した。分類された主成分得点の高いグループと低いグループの特徴づけを、クロス集計の検定結果から行った。なお、クロス集計の検定には、2つの標本の比率を比較する方法¹⁸⁾を用いた。また、アンケート集計には、(株)社会情報サービス製のアンケート集計ソフト「秀吉」を、主成分分析の解析には、(株)日本科学技術研修所製の多変量解析ソフト「JUSE-MA1」を使用した。

3. 結 果

(1) 調査対象者の日常生活における潔癖行動に対する基本因子

調査対象者の日常生活における潔癖行動に対する基本因子を調べるために、表1に示した日常生活における潔癖行動に関する設問、計30問に対する調査対象者の回答を主成分分析に適用した。表2に示したとおり第3主成分までの累積寄与率は24.5%で、因子負荷量の高い値から各主成分の解釈を次のとおりに行った。

第1主成分：「公共施設のドアノブやパソコンのキーボード、電車の手すりまたはつり革には触りたくない」などの設問が集約されたことから、この主成分を〈公共物の使用に関する因子〉と解釈した。

第2主成分：「一度着たTシャツは必ず洗濯してから着る」の設問が集約されたので、この主成分を〈服装の清潔に関する因子〉と解釈した。

第3主成分：「購入後の新しい下着は一度洗ってから着る」と「食事をする際には必ずテーブルを拭く」などの設問が集約されたことから、この主成分を〈きれい好きに関する因子〉と解釈した。

(2) 公共物の使用に対する反応を基にした調査対象者の分類

表2に示したとおり、第1主成分の寄与率が第2主成分の2倍以上の値を示したので、第1主成分、すなわち、公共物の使用に関する因子に対する調査対象者の主成分得点を算出し、0周辺の得点はその主成分に影響力が少ない¹⁹⁾と判断し、正0.9以上、負0.9以上、正0.9未満から負0.9未満の3グループに調査対象者を分類した。各グループの人数は、41人、44人、188人であった(表3)。

(3) 主成分得点の違いによる調査対象者の公共物使用に対する反応

既述の3グループの公共物使用に対する反応を調べるために、第1主成分に高い因子負荷量を示した設問(表2)に対するクロス集計を行い、その結果を図1に示した。正0.9以上を示したグループは、41人中該当者は0人であったのに対して、負0.9以上のグループは、44人中20~72%が該当者であった。両グループ間での検定では、有意な差が認められた。これらの結果から、正0.9以上のグループは、公共施設のドアノブやパソコンのキーボード、また電車の手すりやつり革の使用に対して

表1 潔癖行動に対する調査対象者の反応を調べるために用いた設問内容

No.	設問内容	No	設問内容
1	外食で席が汚れていた場合、席を変える	16	友達と飲み物を回し飲みしない
2	樹脂箸などの使い回し箸の汚れが気になる	17	体を拭くタオルは、毎回、新しいものを使用する
3	注文した外食がトレーの上にこぼれていたなら食べない	18	一度着たTシャツは、必ず洗濯してから着る
4	注文した外食を運んできた店員の身だしなみが気になる	19	購入後の新しい下着は、一度洗ってから着る
5	外食の前に、必ず手を洗う	20	鼻をかんだティッシュは、自分のものでも、ポケットには入れられない
6	外食の前に、おしぼりで手を拭く	21	自分のバッグを電車の床に置くことはできない
7	スプーンやフォークなどを食卓に落としたら、取り替える	22	気に入っても、古着は着たくない
8	陳列棚に並んでいる商品は、前列よりも後列のものを選んで購入する	23	公共施設のドアノブには、触りたくない
9	商品の箱がつぶれている程度なら、気にしないで購入する	24	公共施設のベンチには、座りたくない
10	他人が触った商品は、購入しない	25	電車の手すりまたはつり革には、触りたくない
11	食事をする際には、必ずテーブルを拭く	26	女子用の洋式便器でも、便座にペーパーを敷かないと座れない
12	外食の際に、食器の汚れが気になる	27	公共施設のパソコンのキーボードには、触りたくない
13	ガラスコップに指の跡がついているものは、使わない	28	公共施設のスリッパは、使用したくない
14	こぼした食物は、食べない	29	樹脂などの使い回し箸よりも、割り箸を使いたい
15	缶ジュースは、飲み口を拭いてから飲む	30	公共施設のペン類は使用せず、自分のペン類を使用する

上記の設問に対して、「あてはまる」「あてはまらない」「どちらともいえない」の選択肢の中から一つを回答させた。

表2 第1、第2または第3主成分に比較的高い因子負荷量を示した設問内容

No.	設問内容	第1主成分	第2主成分	第3主成分
23	公共施設のドアノブには、触りたくない	0.593	-0.448	-0.010
25	電車の手すりまたはつり革には、触りたくない	0.589	-0.361	0.015
27	公共施設のパソコンのキーボードには、触りたくない	0.523	-0.304	0.140
18	一度着たTシャツは、必ず洗濯してから着る	0.079	0.455	0.146
19	購入後の新しい下着は、一度洗ってから着る	0.103	0.152	0.597
11	食事をする際には、必ずテーブルを拭く	0.149	0.251	0.413
	寄与率 (%)	13.2	6.0	5.3
	累積寄与率 (%)	—	19.2	24.5

表3 第1主成分に対して、正0.9以上または負0.9未満の主成分得点を示した調査対象者別の公共物使用に対する反応

No.	設問内容	正0.9以上	正0.9未満 負0.9未満	負0.9以上	検定
23	公共施設のドアノブには、触りたくない	0	8.0	59.1	***
25	電車の手すりまたはつり革には、触りたくない	0	11.7	72.7	***
27	公共施設のパソコンのキーボードには、触りたくない	0	1.1	20.5	**
	人 数	41人	188人	44人	

表中の数字は、各グループの人数に対する該当者数の割合 (%)。

検定***は $p < 0.1\%$ 、**は $p < 1\%$ で、正0.9以上のグループと負0.9以上のグループとの間に有意な差が認められたことを示す。

肯定的であるのに対して、負0.9以上のグループは、それらの使用に関して否定的であると考えられた。

以後、正0.9以上のグループを「潔癖志向弱」、負0.9以上のグループを「潔癖志向強」、正0.9未満負0.9未満のグループを「潔癖志向中間」と明記した。

(4)「潔癖志向強」グループの菓子に関する食行動、食品の購買や外食行動、食品の安全性に対する不安、日常生活での潔癖行動における特徴

「潔癖志向強」グループの特徴を明確にするために、グループ別に各設問に対する回答のクロス集計を行った

後に、それらの結果について、「潔癖志向強」グループと「潔癖志向弱」グループとの間で統計的処理として検定を行った。両者の間に有意な差が認められたものをまとめると、次のとおりであった(表4)。

菓子に関する食行動では、「潔癖志向強」グループの者は、好きな菓子をつねに持ち歩いて、あるいはカバンなどに入れており、栄養素添加の菓子の利用を望んでいる。一方、「潔癖志向弱」グループの者は、食事を好きな菓子で済ませることが多い。

食品の購買行動では、「潔癖志向強」グループの者は、陳列棚に並んでいる商品を購入する際には、前列よりも

図1 第1主成分に対して正0.9以上, 正0.9未満負0.9未満, 負0.9以上の主成分得点を示した調査対象者の公共物使用に対する反応
***は $p < 0.1\%$, **は $p < 1\%$ で, 正0.9以上のグループと負0.9以上のグループとの間に有意な差が認められたことを示す。

後列のものをを選び, 他人が触った商品の購入を避ける傾向がみられた。一方, 「潔癖志向弱」グループの者は, 商品の箱がつぶれている程度なら, 気にしないで購入する傾向が強かった。

外食行動では, 「潔癖志向強」グループの者は, 外食の前に必ず手を洗い, 席が汚れている場合は席を変え, 注文した外食を運んできた店員の身だしなみを気にする。また, 樹脂箸など使い回しの箸の汚れが気になり, スプーンやフォークなどを食卓に落としたら取り替える傾向がみられた。

食品の安全性に対する不安では, 「潔癖志向強」グループの者は, 放射性物質含量, 輸入農産物の残留農薬, 鶏インフルエンザ, ダイオキシン含量, 食品添加物などに不安を感じる傾向が強かった。

食生活における潔癖行動では, 「潔癖志向強」グループの者は, 食事をする際にはテーブルを必ず拭き, 外食の際には食器の汚れを気にし, 特に, ガラスのコップに指の跡がついているものを使用せず, 樹脂箸などの使い回し箸よりも割り箸のほうを使いたい意識が強く, また, 缶ジュースは飲み口を拭いてから飲み, 友達と飲み物を回し飲みしない, こぼした食べ物を食べないなどの傾向がみられた。

食生活以外の日常生活における潔癖行動では, 「潔癖志向強」グループの者は, 体を拭くタオルは毎回新しいものを使用し, 鼻をかんだティッシュは自分のものでもポケットに入れない, 自分のバッグを電車の床に置きたくない, 気に入っても古着ならば着たくない意識が強かった。

公共物使用における潔癖行動では, 「潔癖志向強」グループの者は, 公共施設のベンチには座りたくない, 公共施設のスリッパを使用したくない, 女子用トイレでも便座にペーパーを敷かなければ座りたくないなどの意識が強い傾向がみられた。

4. 考 察

(1) 潔癖行動に対する調査対象者の反応を調べるために用いた設問内容の妥当性

設問内容は, 以下のように大別される。

- ・食に関する設問 : No. 1 ~ 16, 29の17問
- ・衣類に関する設問 : No. 17 ~ 19, 22の4問
- ・公共物の使用に関する設問 : No. 23 ~ 28, 30の7問
- ・自分の排泄物に関する設問 : No. 20の1問である。

結果で述べたとおり, 第1主成分には「公共施設のドアノブには触りたくない」「電車の手すりまたはつり革には触りたくない」「公共施設のパソコンのキーボードには触りたくない」など公共物の使用を嫌う設問内容が集約された。

服部ら¹⁾は18~25歳の男女大学生533人を, 高田ら⁷⁾は愛知県内の男女高校生637人を, それぞれ対象に清潔行動についての因子分析を行い, どちらの調査も第1因子に「共用回避因子」が抽出された。集約された設問内容としては, 「他人とスリッパを共用しない」「つり革を握らない」「他人とペットボトルの回し飲みはしない」「便座シートまたは除菌処理のない公衆トイレの便座には座らない」などで, 本調査の結果と同様な傾向を示した。

すなわち, 2001年に実施された服部ら¹⁾の調査結果と本調査の結果が同様の傾向であったことから, 最近10年間以上の大学生の清潔行動に関わる主要因は公共物の使用を避ける態度であることが示唆され, 本調査に用いた設問内容の妥当性が確認された。

(2) 「潔癖志向強」グループの特徴

「陳列棚に並んでいる商品は前列よりも後列のものを選ぶ」「他人が触った商品は購入しない」「樹脂箸など使い回しの箸の汚れが気になる」「外食の際に食器の汚れが気になる」などの食行動および食意識は, 公共物の共用を避ける意識に起因していると考えられた。

表4 潔癖志向弱グループと潔癖志向強グループとの間で有意な差が認められた設問内容

設問内容		潔癖志向弱 (<i>n</i> = 41)	潔癖志向中間 (<i>n</i> = 188)	潔癖志向強 (<i>n</i> = 44)	検定
菓子に関する 食行動	栄養素添加の菓子を利用したい	29.3	38.0	52.3	*
	食事を、好きな菓子で済ませることもある	22.0	10.7	6.8	*
	好きな菓子を、つねに持ち歩いている（カバンなどに入れている）	2.4	12.8	18.2	*
食品の購買行 動	陳列棚に並んでいる商品は、前列よりも後列のものを選んで購入する	43.9	79.4	84.1	***
	商品の箱がつぶれている程度なら、気にしないで購入する	58.5	28.6	20.5	***
	他人が触った商品は、購入しない	0.0	10.6	38.6	***
外食行動	使い回しの箸（樹脂箸など）の汚れが気になる	12.2	60.8	88.6	***
	外食で席が汚れていた場合、席を変える	56.1	59.8	79.5	*
	スプーンやフォークなどを食卓に落としたら、取り替える	46.3	59.8	72.7	*
	注文した外食を運んできた店員の身だしなみが気になる	9.8	38.1	65.9	***
	外食の前に、必ず手を洗う	9.8	28.6	54.5	***
食品の安全性	食品に含まれる放射性物質含量に不安を感じる	48.8	56.4	75.0	*
	輸入農産物の残留農薬に不安を感じる	43.9	54.8	65.9	*
	食品に含まれるダイオキシン含量に不安を感じる	29.3	37.8	52.3	*
	鶏インフルエンザに不安を感じる	31.7	60.1	61.4	**
	食品に含まれる食品添加物に不安を感じる	26.8	45.7	50.0	*
食生活におけ る潔癖行動	外食の際に、食器の汚れが気になる	22.0	87.8	97.7	***
	こぼした食物は、食べない	39.0	63.8	81.8	***
	使い回しの箸（樹脂箸）よりも、割り箸を使いたい	4.9	32.4	72.7	***
	食事をする際には、必ずテーブルを拭く	46.3	67.6	70.5	*
	ガラスコップに指の跡がついているものは、使わない	0.0	27.7	63.6	***
	缶ジュースは、飲み口を拭いてから飲む	0.0	7.4	31.8	***
	友達と飲み物を回し飲みしない	2.4	5.3	27.3	**
食生活以外の 日常生活にお ける潔癖行動	体を拭くタオルは、毎回、新しいものを使用する	43.9	64.9	77.3	**
	鼻をかんだティッシュは、自分のものでも、ポケットには入れられない	12.2	23.9	59.1	***
	自分のバッグを電車の床に置くことはできない	4.9	19.1	52.3	***
	気に入っても、古着は着たくない	2.4	23.9	45.5	***
公共物の使用 における潔癖 行動	電車の手すりまたはつり革には、触りたくない	0.0	11.7	72.7	***
	公共施設のドアノブには、触りたくない	0.0	8.0	59.1	
	女子用の洋式便器でも、便座にペーパーを敷かないと座れない	0.0	4.3	40.9	***
	公共施設のスリッパは、使用したくない	0.0	7.4	38.6	***
	公共施設のベンチには、座りたくない	0.0	2.1	22.7	**
	公共施設のパソコンのキーボードには、触りたくない	0.0	1.1	20.5	**

表中の数字は、各グループの人数に対する該当者数の割合（％）。

検定***は $p < 0.1\%$ 、**は $p < 1\%$ 、*は $p < 5\%$ で、潔癖志向弱グループと潔癖志向強グループとの間に有意な差が認められたことを示す。

本調査では、結果での既述のとおり、「体を拭くタオルは、毎回新しいものを使用する」と「電車の手すりまたはつり革には触りたくない」の傾向が強かった。一方、服部ら¹⁾ または高田ら⁷⁾ の報告では、「電車の手すりまたはつり革には触りたくない」の実施状況が低かったと指摘しており、本調査の結果と異なる傾向を示した。これは、彼らの調査^{1,7)} では、本調査のように潔癖行動に反応する尺度別でのクロス集計結果ではなく、調査対象者全体での単純集計結果であるためと考えられた。その考察を裏付ける本調査

の結果として、「電車の手すりまたはつり革には触りたくない」の設問に対する回答率は、「潔癖志向弱」グループでは0％、「潔癖志向中間」グループでは11.7％と低かった。

本調査で用いた「体を拭くタオルは毎回新しいものを使用する」の設問内容は、彼らの調査^{1,7)} では「ハンカチを毎日取り換える」の設問内容に関連していると思われる。これらの設問に対する回答率は高く、本調査では「潔癖志向弱」グループ、「潔癖志向中間」グループとも

に、40%以上の回答率であった。

本調査で用いた「女子トイレの洋式トイレでも便座にペーパーを敷かないと座れない」の設問内容は、服部ら¹⁾の調査では「便座シートまたは除菌処置のない公衆トイレの便座には座らない」、高田ら⁷⁾の調査では「公衆トイレの便座に座らない」の設問内容に、また、本調査で用いた「公共施設のスリッパは使用したくない」の設問内容は、彼らの調査^{1,7)}では「他人とスリッパを共用しない」の設問内容に、それぞれ関連していると考えられた。彼らの調査結果^{1,7)}では、本調査の「潔癖志向強」グループほどの高い回答率ではなかったが、「潔癖志向弱」グループまたは「潔癖志向中間」グループとはほぼ同様の傾向であった。

本調査の「潔癖志向強」グループの特徴は、「潔癖志向弱」グループとの対比で明確化されると考えられた。すなわち、「潔癖志向弱」グループの回答率が0であった設問内容をまとめると、電車の手すりやつり革、公共施設のドアノブ、女子洋式トイレの便座、公共施設のスリッパ、公共施設のベンチ、公共施設のパソコンのキーボードなど、公共物の共用を嫌う傾向が顕著に観察された。広辞苑によると、「潔癖」は、不潔を極度に嫌うことである。その極度がまさに上記の特徴と思われる。

女子大学生および女子高校生の日常生活における不潔に対する反応が二極化され、それにともなう食行動に顕著な違いが認められた。

5. 要 約

女子大学生および女子高校生の潔癖行動と食行動との関連を調べた。まず、日常生活における潔癖行動に対する基本因子の抽出を行い、次に、潔癖行動に関する基本因子に対する反応の違いによる調査対象者の分類、さらに、分類された調査対象者の食行動および潔癖行動における特徴の明確化を行った。得られた結果は、次のとおりである。

- 1) 日常生活における潔癖行動に関する設問、計30問に対する調査対象者の回答を主成分分析で解析した結果、第1主成分に「公共物の使用」に関連した設問が集約された。
- 2) 第1主成分に対する調査対象者の主成分得点から、正0.9以上の者41人、負0.9以上の者44人をそれぞれ選出し、前者を「潔癖志向弱」グループ、後者を「潔癖志向強」グループとして分類した。
- 3) 「潔癖志向強」グループの食行動における特徴は、好きな菓子を持ち歩き、栄養素添加の菓子の利用を望んでいる。陳列棚に並んでいる食品は、他人が触ったものを避け、前列よりも後列のものを選んで購入する。外食の際には、食器、テーブルおよび椅子などの汚れや店員の身だしなみなどを気にし、使い回しの箸より

も割り箸の使用を好む。また、缶ジュースを飲む前に飲み口を拭いたり、友達と飲み物の回し飲みは行わない傾向が強い。一方、「潔癖志向弱」グループでは、そのような傾向がみられなかった。

以上の結果から、女子大学生および女子高校生の食行動には、彼女らの潔癖行動が大きく関与していることが認められた。

文 献

- 1) 服部恒明, 辻清子, 坂下小織, 山道弘子: 大学生の日常生活における清潔行動, 学校保健研究, 44, 239 (2002)
- 2) 葉山大地, 小林裕美, 櫻井茂男: 一般青年の清潔に対する意識に関する探索的研究, おおみか教育研究, 12, 59 (2009)
- 3) 水越孝: 抗菌プラスチック市場—潔癖化する社会を背景に種々雑多な用途で拡大—, ヤノ・レポート, No.1247, 75 (2008)
- 4) 全日本清潔生活クラブ編: 私もう吊革はつかまない, ソニー・マガジズ, 東京, p.32, 102-104, 118, 130 (1996)
- 5) 藤田紘一郎: 潔癖社会のなれの果て, 新潮45, 32 (5), 37 (2013)
- 6) 藤田紘一郎: 「清潔はほどほどに」が自然である, 望星, 42 (3), 18 (2011)
- 7) 高田直子, 服部洋児, 金子恵一, 平野嘉彦, 村松園江, 村松常司: 高校生の清潔行動と生活習慣に関する研究, 愛知教育大学保健管理センター紀要, 4 (2005)
- 8) 渡辺しき子, 佐藤雅子, 川上亜希, 原田泉, 金山聡子, 川崎郷子, 浅田千加子, 清水希, 池野こはる, 捧恵美子, 田中千夏, 森美雅, 小葉祐子, 志田久美子, 福澤恭子: 看護学生の日常生活における清潔に関する意識と行動, 北里大学保健衛生専門学院紀要, 13, 34 (2008)
- 9) 田中智子, 永田奈央: ベッドサイドの清潔保持に対する看護師の意識と行動, 日本看護学会論文集・第38回看護総合, 日本看護協会出版会, 東京, p.294 (2007)
- 10) 佐藤公彦: 食の安全と健康意識データ集2011, 三冬社, 東京, p.103 (2010)
- 11) 佐藤公彦: 食の安全と健康意識データ集2011, 三冬社, 東京, p.215 (2010)
- 12) 佐藤公彦: 食の安全と健康意識データ集2011, 三冬社, 東京, p.49 (2010)
- 13) 渡辺雄二, 村元美代, 青木宏: 女子学生の食行動に及ぼす食意識の影響, 食科工, 42, 77 (1995)
- 14) 安田三郎, 原純輔: 社会調査ハンドブック, 有斐閣双書, 東京, p.11 (1982)
- 15) 渡辺雄二, 大瀧未鶴希, 辻玲子, 太田徹: 女子学生の食行動に及ぼす食情報の影響, 日本食生活学会誌, 14, 28 (2003)
- 16) 佐藤公彦: 食生活データ総合統計年報2010, 三冬社, 東京, p.142, 147, 152, 217, 236 (2010)
- 17) 佐藤公彦: 食の安全と健康意識データ集2011, 三冬社, 東京, p.19, 36 (2010)
- 18) 大澤清二: 生活統計の基礎知識, 家政教育社, 東京, p.170 (1990)
- 19) 熊谷摩幸美, 渡辺雄二, 青木宏: 食品の安全情報に対する消費者の反応を支配する要因, 食科工, 43, 1264 (1996)